

特集

スポーツ振興で地域活性化 第1回 スポーツ合宿や大会の誘致で活性化

2020年の夏季五輪とパラリンピックの東京開催が決定したことで、スポーツに対する国民の関心が高まっています。政府は、五輪に向けて、選手の強化やスポーツ行政を一元的に担うスポーツ庁の設置などを検討しています。

また、近年はスポーツを行うだけでなく、スポーツイベントを通じたスポーツ・ツーリズムの推進や市民の健康増進を図る取り組みを行うなど、まちづくりとしてのスポーツに力を入れる自治体も増えています。

こうした状況を踏まえ、シリーズ特集のテーマとして「スポーツ振興で地域活性化」を取り上げ、第1回の今回は、「スポーツ合宿や大会の誘致で活性化」と題して、合宿や大会誘致がもたらす地域活性化の効果やスポーツを生かしたまちづくりを進める都市の事例をご紹介します。

寄稿 1

合宿や大会誘致が地域に及ぼす活性化効果

早稲田大学スポーツ科学学術院教授 原田宗彦

寄稿 2

スポーツ合宿誘致の成果で「健康なまち」へ

網走市長 水谷洋一

寄稿 3

スポーツを活用したまちづくりと 地域活性化を目指して

さいたま市長 清水勇人

寄稿 4

国体レベルのスポーツ施設を活用した合宿等の 誘致で全国から選択される田辺市を目指して

田辺市長 真砂充敏

寄稿 5

スポーツ合宿と観光 スポーツを通じた健幸のまちづくり

指宿市長 豊留悦男

合宿や大会誘致が 地域に及ぼす活性化効果

早稲田大学スポーツ科学学術院教授

はらだむねひこ
原田宗彦



はじめに

2020(平成32)年東京オリンピック・パラリンピック大会が決定して以来、全国的な規模で合宿や大会誘致に対する関心が高まっている。その背景には、スポーツで人を動かし、地域に新たな経済・社会的な効果と呼び込もうとするスポーツツーリズムへの理解の深まりがある。そこで本稿では、合宿や大会誘致がもたらす具体的な地域活性化効果を述べるとともに、誘致を促進する組織として、全国的に設立の機運が高まっている地域スポーツコミッションについて解説したい。

合宿や大会誘致がもたらす 地域活性化効果

筆者は、平成14年に出版した『スポーツイベントの経済学』(平凡社新書)の中で、メガスポーツイベントが地域に及ぼす効果として、「社会資本蓄積効果」「都市知名度向上効果」「地域連帯感向上効果」「消費誘導効果」の

4つを指摘したが、規模の大小にかかわらず、合宿や大会誘致にはポジティブな効果が期待される(原田、2002)。

第1の社会資本についてであるが、現代社会におけるスポーツ施設は、道路や水道などと同じ、日々の生活に不可欠な「生活インフラ」と考えることができる。それゆえ、合宿や大会誘致を機にスポーツ施設の建設や改修が行われた場合、それらは新しい社会資本として地域に蓄積される。さらに自転車専用道の整備とともに、電線類の地中化による電柱の撤去や車歩道の段差解消など、都市のバリアフリー化による「スポーツに親しむまちづくり」が重要となる(原田、2014)。

第2に、合宿や大会に関する情報は、都市の名前とともに、国内のみならず海外にも発信される。これが都市の知名度の向上である。昨年さいたま市で開催され、約20万人の観客を集めた「さいたまクリテリウムbyツールドフランス」は、主催者であるフランスのASO(アモリ・スポルト・オルガナザション)

を通じて、世界100カ国以上で放映され、同市の知名度を世界的に高めた。

第3の地域連帯感向上効果は、合宿や大会誘致を通じて、地元住民に共通の意識が生まれることにより、地域アイデンティティが高まることを意味する。実際、地域に誕生した新しいプロバスケットボール・チームの観戦者の間で、地域アイデンティティが有意に高まることが報告されている(原田、2014)。

第4の消費誘導効果とは、域外から大会や合宿参加者(スポーツツーリスト)が集まることにより誘発される付加的な消費活動のことを意味する。現在日本では、275のトリアスロン大会と、1000を超えるマラソン大会が開かれているが、域外からスポーツツーリストとして参加する人々の消費誘導効果は大きい。例えば、筆者の研究室が試算した、14のトリアスロン大会に「域外」から参加した1人当たり宿泊費の平均は6452円であった。これに、滞在中に使った飲食費の平均4520円と観光費平均1211円を加



図1 JSTA が共催するスポーツイベントパビリオンの案内

**地域に必要とされる
合宿や大会の誘致組織**

地域の活性化を目的として、合宿や大会を積極的に誘致するための組織が「スポーツコミッション」である。現在全国の自治体で

え、平均同伴者数の4.8人と1大会当たり参加者数平均である513人を乗ずると、約3000万円(2999万9419円)の直接的な経済効果があったことが判明した(早稲田大学スポーツビジネス・マネジメント研究室、2011年)。通常、トライアスロン大会やマラソン大会の場合、前日の説明会への参加が義務付けられており、宿泊や飲食を伴う2日間の大会になるため、比較的小規模の大会でも、それなりの経済効果が発生することになる。

設置が進んでいる。映画のロケを誘致するために設置された「フィルムコミッション」のスポーツ版と考えると分かりやすい。すなわち、合宿や大会誘致にかかる支援や情報提供を行う、ワンストップサービスの機能を持つ。

自治体には、これまでスポーツ合宿やスポーツ大会の誘致を専門に行う部局は存在しなかった。スポーツ大会の誘致に関しても、偶発的に持ち込まれる大会に対して、スポーツ関連部局がその都度に対応するケースや、観光関連部局が補助金を出して大学や実業団の合宿にインセンティブを与える程度であった。

しかしながら、平成24年に「一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構」(JSTA)が設立され、スポーツツーリズムを本格的に推進する体制が整備された。筆者が会長を務めるJSTAは、全国的なスポーツツーリズムの普及促進を目指し、月に1回のセミナー、秋のカンファレンス、春のコンGRESSを開催してきたが、3年目に当たる平成26年は、ムーブメントとしての啓蒙

的に推進する体制が整備された。筆者が会長を務めるJSTAは、全国的なスポーツツーリズムの普及促進を目指し、月に1回のセミナー、秋のカンファレンス、春のコンGRESSを開催してきたが、3年目に当たる平成26年は、ムーブメントとしての啓蒙

スポーツコミッションの設立支援

から次のステージに移行しつつある。それが、スポーツツーリズムの考えをベースとし、域外から人を呼び込んで地域を活性化するスポーツコミッションの設立支援や、スポーツコミッションの連合体である「スポーツツーリズム全国連絡協議会」の設置、そしてスポーツイベントをテーマとした展示会の開催である(図1)。

平成25年度には、観光庁による「将来的な

表1 全国に設置(もしくは予定)されているスポーツコミッション

タイプ	自治体名	組織名	設立年
市レベル	さいたま市	さいたまスポーツコミッション	2011
	新潟市	新潟市文化・スポーツコミッション	2013
	十日町市	十日町市スポーツコミッション	2013
	松本市	松本スポーツコミッション	2013
	宇部市	宇部市スポーツコミッション	2014(10月)
県レベル	佐賀県	佐賀県スポーツコミッション	2013
	愛知県	あいちスポーツコミッション	2015(予定)
	岐阜県	岐阜県スポーツコミッション	2015(予定)
	沖縄県	スポーツコミッション沖縄	2015(予定)
広域連携	関西エリア	スポーツコミッション関西	2012
	盛岡8市町村	盛岡スポーツツーリズム連絡協議会	2015(予定)
	静岡県	西部・中部・東部地域スポーツ産業研究会	2013
	鳥取県	鳥取県アウトドアスポーツ協議会	2013
NPO	(御殿場市)	ふじさんスポーツコミッション	2014

商品化に向けた観光資源磨きのモデル調査業務」において、「将来的な商品化に向けた地域の取り組みのモデル調査②」としてスポーツコミッション設立のための調査事業が行われた。ここでは、事例調査として以下の10地域が選ばれた。これらは、札幌市（観光文化局スポーツ課）、青森県（教育庁スポーツ健康課）、新潟市（新潟市文化・スポーツコミッション）、金沢市（市民局市民スポーツ課）、宇都宮市（経済部観光交流課他）、三島市（産業振興部商工観光課）、和歌山県（上富田町スポーツ観光推進協議会）、鳥取県西部地区（鳥取県アウトドアスポーツ協議会）、松山市（産業経済部観光・国際交流課他）、佐賀県（くらし環境本部文化・スポーツ部ス

図2 新潟市文化・スポーツコミッションのパンフレット



スポーツ課)である。

平成26年1月には、スポーツコミッションの全国的なシンポジウムを大阪で開催し、ここで前述の「スポーツツーリズム全国連絡協議会」が設立された。同協議会の事務局機能はJSTAが担い、第2回協議会は平成26年7月に東京で開かれた。現在は、文部科学省が地域スポーツコミッションによる「スポーツによる地域活性化事業」(新規)を平成27年度の概算要求に盛り込むなど、スポーツコミッションの役割に注目が集まっている。

現在のスポーツコミッションの設置状況

スポーツツーリズムの推進を図るスポーツコミッションには、

表1に示すように4つのタイプがある。第1は、市が設置するもので、さいたま市の「さいたまスポーツコミッション」や新潟市の「新潟市文化・スポーツコミッション」(図2)がこれに当たる。第2が県レベルでの設

置で、「佐賀県スポーツコミッション」や平成27年に設置を目指している「あいちスポーツコミッション」、そして「岐阜県スポーツコミッション」などである。第3は広域連携のタイプで、関西広域連合をベースとした「スポーツコミッション関西」が例の1つである。そして4番目のタイプとしてNPOがある。

2019(平成31)年のラグビーワールドカップ大会や2020(平成32)年の東京五輪に向けて、自治体では合宿や大会誘致の熱が高まりを見せているが、スポーツコミッションの真の役割は、合宿や大会誘致に留まらず、それらの事業を触媒とした地域の活性化やまちづくりといった「地域のマーケティング」にあることを最後に付け加えておきたい。

参考文献

- ・原田宗彦「スポーツイベントの経済学」平凡社新書、2002年
- ・原田宗彦「地域密着型プロスポーツとトポフィリアに関する実証的研究」平成23年度〜平成25年度科学研究費補助金報告書(基盤研究B…23300235)
- ・原田宗彦「スポーツに親しまちづくり①…スポーツマネジメントの時代33」月刊体育施設、2014年8月号、26〜27頁
- ・早稲田大学スポーツビジネス・マネジメント研究室・日本トライアスロン連合「第2回トライアスロン参加者調査報告書」2011年

スポーツ合宿誘致の成果で「健康なまち」へ

あはしり
網走市長（北海道）

みずたによろいち
水谷洋一



はじめに

網走市は今、「健康」をキーワードにまちづくりの方向を定め、健康で安心なまちづくりを目指した政策を展開している。「健康な市民」「健康な経済」「健康なまち」を創造していくことは、まちの明日への希望と活力を生み出す源である。

本市のスポーツ合宿は、昭和63年ソウル五輪の直前合宿の受け入れを契機に始まった。競技種目はボート、バドミントン、女子体操、マラソンの4種目であり、日本体育協会関係者から環境が夏合宿に非常に良いことを指摘いただき、体育協会・競技団体・市を中心とした構成で、網走市スポーツ合宿実行委員会を立ち上げ、受入体制を整えた。

現在では、網走市は北海道を代表するスポーツ合宿地として、ラグビー、陸上、バ

イアスロンなど毎年約1700人のトップアスリートが練習に励んでいる。

トップアスリートの強化に必要なものとして、良好な練習環境、質の高い栄養と休養の3つが重要と指摘されており、網走にはその条件が揃っている。ラグビーのトップリーグ関係者から「日本一の芝」と高い評価をいただいている競技場や、五輪やパラリンピックの代表選手の合宿にも活用されている多彩なランニングコースなどの練習環境が整い、冷涼な気候と温泉で質の高い休養がとれるので、ケガをせずにベストコンディションで試合に臨むことができる。そして、網走は海・山の食材の宝庫であり、美味しく栄養価の高い良質なタンパク質源を摂ることができる。

また、大都市圏からの交通アクセスの利便性が高く、女満別空港から市内までは、車で27分程度である。担当課による

送迎が行われており、移動時間や荷物運搬へのストレスがないことは合宿誘致に有利である。

さらに、平成24年には、日本オリンピック委員会（JOC）が、全国2カ所に指定するリオ五輪に向けた陸上競技強化センターの一つに網走が選ばれた。網走が指定されたのは、施設面だけではなく25年間積み重ねてきたスポーツ合宿のノウハウが評価されたのだと思っており、そして、宿泊施設などを含めた市民のスポーツを支える受入体制がしっかりしていることが決め手になったと感じている。

このように、先輩たちが切り開いた財産を発展させ、東京五輪に向けた合宿誘致を実現するためにも、まずは、世界陸上北京大会やリオ五輪、ラグビーW杯日本大会などへの準備と対応にしっかりと取り組むことが重要と考えている。

ラグビーの合宿状況について

トップリーグから多くのチームに合宿をいただいているラグビーは、昭和63年の法政大学の合宿が契機となり、翌年からは「網走スポーツ・トレーニングフィールド（現在ラグビー場芝生7面）」を建設し、本格的



網走ラグビーフェスティバル

にラグビー合宿の受入体制の整備が開始された。

平成5年には、日本代表のセレクション会場に本市が選ばれ、各チームのトップ選手にグラウンドを使っていたதாக好评を得た。所属チームに戻った代表選手から、網走の練習環境の優位性が伝えられ、平成6年からトップリーグのチームが本格的に合宿に訪れるようになった。現在では、昨年度トップリーグ、日本選手権の二冠を獲得したパナソニックをはじめ、優勝経験のあるサントリー、東芝、神戸製鋼などトップチーム7チームの合宿をいただいている。

このようなトップチーム同士による多くの練習試合が毎年組まれていることから、日本ラグビー協会レフリー委員会の協力を得て、すべての試合にトップレフリーを配置いただき、「網走ラグビーフェスティバル」として公開する取り組みを12年前から開催している。網走市民はもとより遠方からも多くのファンが観戦に訪れるほか、今年も、日本代表ヘッドコーチのエディー・ジョーンズ氏も観戦された。

今後は、リオ五輪7人制日本代表合宿、W杯日本大会のベースキャンプ地として選ばれるよう、ラグビー合宿を誘致している近隣自治体とも連携して、さらなる練習環

境を充実させていきたいと考えている。

陸上競技の合宿状況について

長距離選手を中心とする陸上競技の合宿は、前述したソウル五輪の直前合宿にマラソンの瀬古選手、新宅選手に合宿いただいたことが契機となった。



ホクレン・ディスタンスチャレンジ網走大会

今年のニューイヤーズ駅伝で8度目の優勝を飾ったコニカミノルタ陸上部は、平成元年から26年連続で合宿をいただいております、ケニア代表として3大会連続で五輪マラソン代表として出場したエリック・ワイナイナ選手は、3大会とも本市で直前合宿を行い、銀メダル、銅メダルを獲得している。このように、成果の出る合宿地として評価を得ながら各種大会や企業等の訪問を重ねた結果、合宿に訪れるチームも徐々に増え、多くの選手に五輪や世界陸上の直前合宿の地として利用いただいている。

さらに、陸上合宿で追い風になったのは「ホクレン・ディスタンスチャレンジ網走大会」の開催である。12年前から日本陸連強化委員会の主導により開催されているトラックレース大会であり、本年は400名を超えるトップランナーのエントリーにより19レースが行われた。この大会を期に、今まで網走で合宿をしていなかったチームに網走の練習環境を知っていただくことができ、その後の網走合宿の参加チーム拡大につながっている。

パラリンピックを目指すアスリート

本市では、障がいを持ちながら、パラリンピック出場など高い目標に向かい努力さ

れているアスリートの方の合宿も積極的に受け入れている。

特に、近年はパラリンピック冬季大会バリアスロン競技の合宿が行われており、網走射撃協会の全面的な協力を得て、障がい者クロスカントリースキー日本チームの合宿を実施していただいている。今年開催されたソチパラリンピックバリアスロン銅メダリストの久保選手は、ソチ出発の直前まで網走で合宿を行っていた。

この他、レーサーと呼ばれる競技用車椅子の競技の合宿もいただいております、市内に多様に整備されたランニングコースを利用して練習に励んでいる。

網走出身の狩野亮選手や、網走を合宿地としている久保恒造選手などの金メダリストとの関係を強みとして、積極的な合宿誘致を進めるとともに、健康度や障がいの有無などにかかわらず、共に「見る・聞く」支える「バリアフリー・スポーツ」の考え方を広め、深めることが重要と考えている。

平成29年に本市において開校する日本体育大学の特別支援学校高等部は、知的障がいをもつ生徒を受け入れることから、スポーツ振興と障がい者の教育分野でのモデルとして新たな展開に期待をしている。

今後、合宿を通じた日本スポーツ界の

競技力向上に微力ながら貢献するとともに、スポーツ振興を切り口として、障がい者にとつて暮らしやすいまちづくりを進めることは、今後、高齢社会に暮らす市民にとつても優しい「健康なまち」を実現することにつながると考えている。



網走スポーツ・トレーニングフィールド

スポーツを活用したまちづくりと地域活性化を目指して

さいたま市長（埼玉県）

しみずはやと
清水 勇人



東日本のゲートウェイ

さいたま市は、関東平野のほぼ中央部に位置し、東京から30km圏域にあり、中山道の宿場町等として発展してきた歴史を持つ。優れた交通インフラを擁し、特に鉄道は、新幹線5路線をはじめ、JR各線や私鉄線が乗り入れる東日本の結節点となっており、大宮駅の1日の乗降客数は約67万人にのぼり、同駅周辺には商業・業務機能の集積が進んでいる。2015年には北陸新幹線が金沢まで、2016年には北海道新幹線が新函館まで開業し、東日本のゲートウェイとしてさらなる交流の活発化が期待されている。

人口は約125万人、面積は217.49km²、気候は太平洋側気候の影響から、冬は晴天が続く降水量も比較的少なく、1年を通して自然災害を受けにくい、穏やかで住みやすいまちとなっている。

さいたま市成長戦略

このような地理的優位性を生かし、さいたま市では平成25年度より「さいたま市成長戦略」に取り組んでいる。

現在、わが国の景気は緩やかな回復を続けており、明るい兆しが見えてきた。しかしながら、日本の総人口の減少や特に都市部で急速に進む高齢化、あるいは高度経済成長期に大量に整備した施設・インフラの老朽化など、わが国を取り巻く環境は厳しいものとなっている。本市においても、平成37年までは人口の増加が見込まれるものの、その後は団塊ジュニア世代が他の大都市よりも多いことから高齢化が急速に進み、人口が減少していくと予想されている。

このような中において、これからの5年、10年が本市の将来にとって最も重要な時期であると考え、地域経済の活性化や都市機能・利便性の向上、都市イメージの向上等を図る

ため、「さいたま市成長戦略」により本市の持続可能な発展を目指すこととしている。

「さいたま市成長戦略」では、国際観光都市戦略「さいたまMICE」、スポーツ観光・産業都市戦略、医療ものづくり都市構想、環境技術産業の推進、東日本の中枢都市構想、広域防災拠点都市づくり、戦略的企業誘致と国際展開支援、という7つのプロジェクトを推進している。各プロジェクトの推進にあたっては、可能な限り民間活力や企業の力を活用し、民間の経済活性化につなげていくことで、東日本の中枢都市としての発展・成長を促し、「市民・企業から選ばれる都市の実現」を目指すこととしている。

さいたま市の強み「スポーツ」

本市は、スポーツに対する市民の関心が高く、入込観光客数に占めるスポーツ観戦者の割合が高いという特徴を持っている。また、サッカーJリーグのクラブが2チー



平成23年10月本格的スポーツコミッションとしては国内初となる「さいたまスポーツコミッション」を創設

ム、女子プロ野球チームが2チームあるなど、プロのクラブチームが多数存在するとともに、埼玉スタジアム2002やさいたまスーパーアリーナをはじめとするスポーツ施設が集積している。

このような背景を持つ本市では、生涯スポーツの振興およびスポーツを活用した総合的なまちづくりの推進を図り、健康で活力ある「スポーツのまちさいたま」を築くことを目的とし、平成22年4月に「さいたま市スポーツ振興まちづくり条例」を施行した。

平成23年10月には、本格的スポーツコミッションとしては国内初となる「さいたまスポーツコミッション」を創設し、本市およびその周辺地域のスポーツ資源や観光資源を最大限に活用した積極的なプロモーション活動を行い、全国的・世界的な大会をターゲットとした各種競技大会等スポーツ関連イベントの誘致とともに、大会運営におけるさまざまな支援を行っている。スポーツコミッションは、「スポーツによる地域経済活性化のエンジン」として、スポーツの分野で新たな観光・交流人口を拡大し、地域スポーツの振興と地域経済の活性化を図るものである。

スポーツコミッションは、スポーツイベントの開催・誘致に当たり、3つの戦略方針を掲げている。第1に、特定競技やカテゴリー（種別）の聖地（メッカ）づくりを目指した取り組みである。女子サッカー、女子野球、バドミントンなどの特定競技やカテゴリー（性別・年代別など）の大会を戦略的に誘致・開催して「スポーツのまち」としての本市のアイデンティティをより明確にし、ブランド価値創出を図っている。第2に、地域への経済波及効果の高いジュニアやシニア層の大会などの誘致、第3に、市内の自然や都市環境を生かしたスポーツイベントの振興を掲げている。ウォーキングやサイクリングなどの自然や都市環境を生かしたスポーツイベントを「エコロジカルスポーツ」と位置付け戦略的に振興

することを、施設利用型スポーツ大会の誘致と平行して展開している。

具体的な活動としては、開催会場の確保や調整、スポーツイベント開催助成金制度による財政支援、大会の広報宣伝活動、飲食物販売所の設置等、各種運営支援を推進し、広報宣伝活動については、ホームページや市記者クラブへの情報提供等、支援イベントの集客プロモーション活動まで実施している。

また、市内の「食」をテーマとしたイベントを同時開催することにより、スポーツイベントのにぎわいを創出するとともに、主要なスポーツイベントにおいて「さいたま市の食」を広くPRする機会として有効に活用し、より効果的に地域経済を活性化する取り組みを実施している。

スポーツコミッションを立ち上げた平成23年度の誘致実績は17件となっており、プロバスケットボールのbjリーグオールスター戦や総合格闘技UFC JAPANなどのスポーツ大会・スポーツイベントの誘致・支援を行った。平成24年度の誘致実績は37件で、FIFA U-20女子ワールドカップジャパンやなしこリーグオールスター戦などの誘致・支援を、平成25年度の誘致実績は42件となっており、さいたまクリテリウムbyツールドフランスやISU世界フィギュアスケート選手権大会を開催した。昨年度のスポーツ分野における推定経済波及効果は、少なくとも約250億円になるだ



世界最高峰の自転車競技レース「ツール・ド・フランス」の名を冠した世界初のクリテリウムレース「さいたまクリテリウムbyツールドフランス」(今年度は「2014ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム」として開催)

ろうと考えている。

こうした取り組みが高く評価され、昨年2月には、スポーツツーリズム賞部門の最高賞である「国土交通省観光庁長官賞」を受賞した。

2014ツール・ド・フランス さいたまクリテリウム

今後、急激に少子化・高齢化が進む中で、本市にとって「環境」「健康」「スポーツ」がキー

ワードになると考えており、その要素を併せ持つ「自転車」という素材を有効に活用することで、本市の強みを生かしたまちづくりができるものと考えている。

さいたまクリテリウムは、こうした自転車を活用したまちづくりを進めていく上での核となる大会と位置付けており、今年度は、10月25日(土)にさいたま新都心を会場に、「2014ツール・ド・フランスさいたまク

リテリウム」を開催する。

本市にとってシンボリックな大会である、この「2014ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム」は、昨年度に続き2回目の開催となるが、今大会では、さいたまSPAアリーナ内をコースの一部として設定するなど、趣向を凝らしたコース設計となっており、昨年度より魅力の増した大会となっている。

今大会の最大の見どころは、何と言ってもコース終盤の約600mの直線コースのデッドヒートである。是非、会場に足を運んでいただき、さいたま新都心で練り広げられる世界トップレベルの自転車競技を、目で、耳で、そして全身で感じていただきたい。

さらに、自転車を活用したまちづくりを進めるため、「(仮称)さいたま自転車総合利用計画」の検討を進めており、今年度には、自転車の総合的な施策をとりまとめ、本市の魅力と活力向上に資することを目的とした「(仮称)さいたま自転車まちづくり大綱」を策定することとしている。

今後もこの大会の継続開催や、国際的なスポーツイベントの誘致によるスポーツ観光を推進するとともに、市民誰もが年齢や体力に応じてスポーツに親しめるまちの実現に向けて、スポーツを活用した総合的なまちづくりを進めたいと考えている。

国体レベルのスポーツ施設を 活用した合宿等の誘致で 全国から選択される田辺市を目指して

田^{たなべ}辺市長（和歌山県）

真^{まなご}砂^ご充^{みつ}敏^{とし}



紀の国わかやま国体を契機として

田辺市は、紀伊半島の南西部に位置する和歌山県南部の中心都市で、平成17年に旧田辺市、龍神村、中辺路町、大塔村、本宮町が合併し、面積1026km²の広大な市域を有する現在の田辺市となり、「自然と歴史を生かした新地方都市」の創造を目指したまちづくりを推進している。

平成26年は熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録10周年、平成27年は「紀の国わかやま国体・わかやま大会」の開催、そして、新市誕生10周年を迎える。この全国から注目される機会を捉え、本市では、田辺市そのものをブランド化していく「価値創造プロジェクト」を始動させ、その活動の基本となる概念を「田辺+（プラス）魅力はつけん委員会」として、全国から選択される田辺市を目指す取組を進めている。さて、平成27年9月26日から開催される

「紀の国わかやま国体・わかやま大会」は、本県においては44年ぶり2回目の国体であり、県内各地で国体に向けたスポーツ施設の新設・改修が進められている。本市においても総事業費約93億円をかけて、軟式野球、サッカー、ボクシング、弓道の会場となるスポーツ施設の整備を進めている。

このうち、弓道競技の会場となる弓道場については、12人立ちの近的場、9人立ちの遠的場を兼ね備えた全国屈指の施設であり、国体リハール大会で競技を行った選手からは大変好評をいただいた。

また、軟式野球競技の会場となる野球場は、かつてプロ野球の南海ホークスがキャンプに使用していた市民球場を移設建築するもので、両翼100m、センター122m、約5000人の観客席を備え、外野の人工芝には暑熱ストレス対策のミスト噴霧装置、隣接地には1990m²の室内練習場も整備する計画で、平成26年度中の完成を目指して

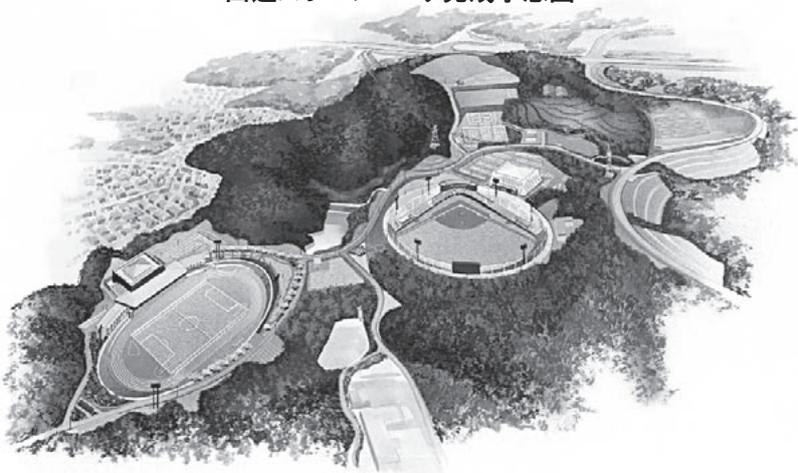


12人立ちの近的弓道場

急ピッチで工事を進めている。

サッカー競技の会場となる陸上競技場は、全天候型ウレタン舗装8レーンのトラック、ミスト噴霧装置を備えた投てき対応ロングパイル人工芝のインフィールドと約3000人の観客席を備え、ボクシング競技の会場となる体育館は、バスケットボールやバレーボールのコートが2面確保でき、1048人の観客席を備えている。陸上競技場、体

田辺スポーツパーク完成予想図



育館に加え、ダンス等にも利用できる250㎡の多目的ホール、152人収容の宿泊施設が平成26年10月に完成する。

陸上競技場、体育館、野球場を含めた三四六総合運動公園は、南紀田辺インターチェンジから約700mという交通アクセスの利便性の良さに加え、他にも人工芝のテニスコート6面、12900㎡の多目的グラウンド、4000㎡のサブグラウンドもあわせて整備するとともに、全国からの公募により「田辺スポーツパーク」という愛称も決まり、完成すれば30・8haに及ぶ県南部のスポーツ振興の拠点施設となる。

この国体レベルのスポーツ施設を活用して、県内外から合宿やスポーツ大会を誘致して、スポーツ振興、交流人口の増大、地域活性化につなげていきたいと考えている。

広域連携による相乗効果を

国体レベルのスポーツ施設は隣接自治体にもあり、上富田町には、なでしこジャパンがキャンプで使用したサッカー・ラグビーのグラウンド3面と野球場等を有する上富田スポーツセンター、白浜町には、選手の足腰に負担がかからない人工クレーの20面のテニスコート、すさみ町には、西日本最大級の本格的グラウンドゴルフ施設がある。

本市を含む県南部エリアは、世界文化遺産に登録されている「熊野古道」、日本サッ

カー協会のシンボルマークでサッカー日本代表チームのエンブレムにも使用されている八咫鳥が仕える熊野本宮大社を含む「熊野三山」、パンダ飼育数日本一を誇る「南紀白浜アドベンチャーワールド」、ハワイのワイキキビーチとの友好姉妹提携を結んでいる近畿地方屈指の海水浴場である「白良浜」、ファミリー層に人気が高い「田辺扇ヶ浜海水浴場」、世界95カ国に広がり日本を代表する武道の一つとなった合気道の開祖「植芝盛平翁生誕地」としての数々の顕彰碑、ナショナルトラスト運動の先駆けとして一躍その名を知られるようになった「天神崎」、日本三美人湯の一つ「龍神温泉」、川原を掘ればお湯が湧き出す「川湯温泉」、熊野詣の湯垢離場として栄えた「湯の峰温泉」、日本三大温泉と称された「南紀白浜温泉」、JR紀伊田辺駅至近で200軒以上の飲食店が立ち並ぶ「味光路」など、スポーツ以外の資源にも恵まれており、ホテルから民宿まで多彩な宿泊施設と相まって、スポーツや観光で滞在するには絶好の地域である。

そこで、国体後のスポーツ施設の有効活用を図るとともに、交流人口増大による地域活性化を目指し、本市を含む4市町で「南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会」を設立した。この協議会は、行政のスポーツ部門と観光部門で構成しており、「広域の利点を生かした戦略的な受入体制の構築や情報



完成間近の陸上競技場と体育館

発信を行う」「特にオフシーズンや平日の誘致を進める」ことを基本方針として、各種の取組を進めていこうとしている。

スポーツ合宿誘致 後発地域としての戦略

国内旅行が伸び悩む中、スポーツ合宿は

安定した市場として、旅行業界でも注目を集めており、大手旅行会社でのスポーツ合宿専門部門新設にとどまらず、スポーツ合宿専門旅行会社の設立など、市場規模が年々拡大してきている中で、当地域のホテル・旅館・民宿においてもスポーツ合宿の受け入れに力を入れている。

しかし、スポーツ合宿は他県において積極的な取組が既に進められており、本市を含む県南部エリアは、スポーツ合宿誘致の後発地域であるということは否めない。しかしながら、後発地域であっても、地域資源を生かし、地域が連携することで、スポーツ合宿地としての魅力を先進地に対抗できるレベルに引き上げることが可能であると考えている。

当地域のスポーツ合宿における優位点は、冬合宿に最適な九州南部に劣らぬ温暖な気候や高速道路延伸による京阪神からのアクセスの良さに加え、歴史・文化・温泉・グルメ・観光などスポーツ以外の地域資源が多様で豊富なこと、国体レベルのスポーツ施設が集積していることが挙げられる。

一方で、パンフレット、ホームページ、プロモーションなどの情報発信力をはじめ、スポーツ合宿地としての認知度やブランド

力が弱い、近隣施設も含めた地域のスポーツ施設の空き情報がワンストップで確認できない、予約の受付開始時期や予約の受付方法などが地元利用者優先となっているなどの課題もある。

今後は、広域で連携し、先進地に比肩するレベルまで引き上げ、より一層磨きをかけていくことを基本に取り組みでいきたいと考えている。

具体的な戦略メニューの取りまとめはこれからであるが、例えば、高速道路を使った低価格かつ自由度の高い移動手段をはじめ、温泉を活用したリハビリメニューや田辺扇ヶ浜海水浴場の砂浜での基礎体力づくりメニュー、さらには、地域の特産品である梅を使った疲労回復飲料や合宿後にもう1泊したくなるプラスワンの観光メニューの提案、今後の成長が見込まれるダンスや音楽系の合宿誘致などに磨きをかける余地は十分残されていると考えている。

このように磨きをかけた地域の魅力に、地元のおもてなし力の向上とターゲットを絞った情報発信力と営業力の強化を加えて、スポーツ合宿地として全国から選択される田辺市「田辺+（プラス）」を実現していきたい。

スポーツ合宿と観光 スポーツを通じた健幸のまちづくり

指宿市長（鹿児島県）

豊留悦男



温泉保養都市指宿

指宿市は鹿児島県薩摩半島の最南端、錦江湾口に位置し、人口4万2777人（平成26年8月1日現在）、面積149.01km²で、東は錦江湾、南は東シナ海に臨む。中央部には九州最大の湖である池田湖、西部には、「日本百名山」の一つで見事な円すい形の開聞岳、南部には浦島太郎伝説が伝わる長崎鼻、東部には潮の干潮で陸続きになり、環境省の「かおり風景百選」にも選出された知林ヶ島を有し、市の34.5%が霧島錦江湾国立公園に指定されている風光明媚な所である。

また、世界的にも珍しい天然砂むし温泉をはじめ、豊富に湧出する温泉に恵まれ、1日に10万tも湧出する唐船峡京田湧水は、環境省の「平成の名水百選」に選出され、この湧水を利用した回転式そうめん流しは多くの方々に利用されている。

本市の年間平均気温は約19℃と温暖で、亜熱帯的な気候である。この温暖な気候の

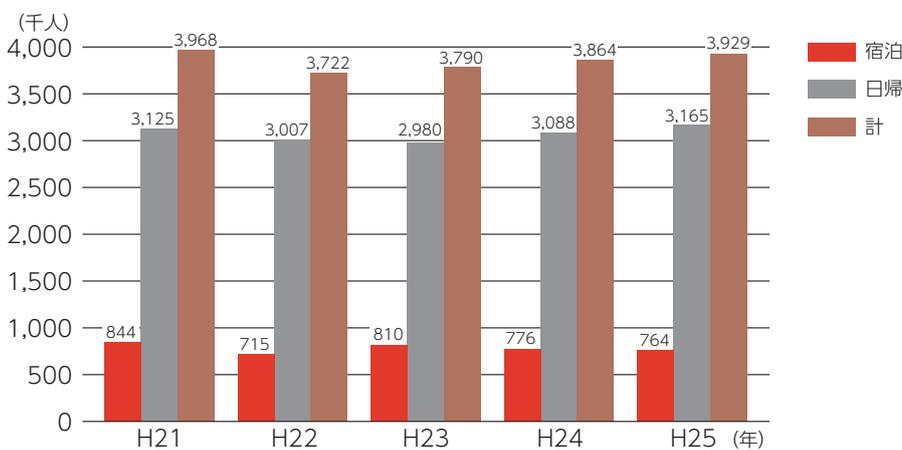
もと、新春には、菜の花満開の中で約2万人が参加する、「いぶすき菜の花マラソン大会」や「いぶすき菜の花マーチ」、「指宿トライアスロン大会」など年間を通じてさまざまなスポーツイベントが開催されている。

このような恵まれた観光資源の中、平成25年は約76万4000人の宿泊客が訪れた。

スポーツ合宿の現状と効果

平成25年度、本市で合宿を行った主なスポーツチームは、サッカーJ1柏レイソル、浦和レッドダイヤモンズ、なでしこリーグ岡山湯郷ベル、社会人野球の三菱重工横浜硬式野球部、ルネサスバドミントン部、ヤマダ電機陸上部、順天堂大学陸上競技部などがある。また、毎年鹿児島県の中学、高校駅伝大会や、全九州大学弓道大会なども開催されており、本年5月には、サッカー男子日本代表チームが、FIFAワールドカップブラジル大会に向けた国内最終合宿を本市で行い、街中が大いににぎわった。

観光客の推移



このように、プロスポーツ、社会人、学生と年間約20チーム、延べ4252人がスポーツ合宿で本市を訪れている。本市は前述のとおり、温暖な気候にあり、冬場の合宿に適しているとともに、砂むし温泉をはじめ豊富な温泉に恵まれ、選手のオーバールールに最適な環境にある。

鹿児島県全体で見ると、平成11年度の調査開始以来、延べ人数、実人数、団体数ともに過去最高を更新した。(平成25年度延べ人数13万1404人、実人数2万8177人、団体数1169団体)これは県、市町村、宿泊施設が一体となって国内外における誘致活動に取り組んできたことによりスポーツ合宿地鹿児島県の定着化が図られてきているといえる。

サッカー男子日本代表をはじめ、サッカーJ1のチームが本市で合宿を行う理由は、温暖な気候、温泉に加えて、グラウンド、宿舍など選手を支える設備が優れているという点も大きい。本市にある、「指宿いわさきホテル」は、ホテル敷地内に良質な天然芝のグラウンドを2面有しており、宿舍とグラウンドの移動が容易であり、合宿には非常に優れている。

また、本市では、スポーツ合宿奨励品等支給制度を設け、プロ、アマ、学生等、市外スポーツチームが10名以上で5泊以上した際に、奨励品や奨励金の支給を実施しており、合宿しやすい環境を整えている。プ

ロチームが合宿を行うと、関係者、ファン、マスコミ等も訪れ大きな経済効果をもたらす一方で、青少年に与える影響も大きい。本県には、プロ野球やJリーグの本拠地はなく、年間数試合の公式戦が、鹿児島市内で開催されるのみである。そのような中、プロチームの合宿が行われ、間近で見るプロの技に青少年が目を輝かせている姿を目の当たりにすると、スポーツ合宿の効果として、経済効果だけにはとどまらない重要性を感じている。

おもてなし日本一

サッカー男子日本代表チームの合宿の際は、練習は非公開であるにもかかわらず、多くのサッカーファンや報道陣が駆け付け、市内は大変にぎわった。われわれの一番の使命は、選手が落ち着いて練習に集中し、リラクセスしていただくことであるが、それと同時に、「指宿に来てよかった、また来たい」と選手はもとより、全国から駆け付けたファンや報道陣の方々に思っていただけのこととは何かと考えた。

本市では、毎年、新春1月第2日曜日に「いぶすき菜の花マラソン大会」を開催している。今年で第33回を数え、約2万人が参加する日本陸連公式の市民マラソン大会である。このマラソン大会は、市内の地形を生かし、周遊コースで市内の観光地、名所を巡りながらゴールするコースとなっている。

。参加者の多くがリピーターであるが、その理由の一つが、「おもてなし」である。東京オリンピック招致の際に「おもてなし」という言葉が使われたが、それ以前から本市では、市民一人一人にこの「おもてなし」の精神が養われていると自負している。マラソンコース沿道では、地元の方々の熱い応援はもとより、特産であるソラマメ、さつまいも、お茶などが各所で振る舞われるのである。大会実行委員会が設置しているエードとは別に、沿道からさまざまな形で市民がランナーを励まし、もてなしている。これは、「また、この町に来てほしい、この町を感じてほしい、美味しいものを食べてほしい」という気持ちからである。

こうした市民の方々の想いがランナーに伝わり、毎年多くのリピーターを生むマラソン大会に成長したのは、まぎれもなく市民一人一人のもてなしの力によるものだと言える。

現在、鹿児島中央―指宿で運行している観光特急「指宿のたまて箱」は、運行開始から乗車率7割を超える人気列車である。この列車は毎日運行しているが、列車が指宿市内を通ると、沿道で畑作業をしている方は、仕事の手を止め、列車に手を振る。線路沿いの高校では、通過時刻と休み時間が合えば、窓から手を振る。市役所では平日の昼休みと通過時刻が重なるため、職員が歓迎の旗を毎日振っている。指宿駅に到着すると、ボランティア

ガイドが出迎える。こうした市民やボランティアによる「おもてなし」が、この列車の人氣にもつながっている。

この「おもてなし」の精神で、サッカー男子日本代表が指宿市に到着した際には、バスが通過する沿道に多くの市民が歓迎の意を表そうと手を振った。小中学校、高校でも授業を中断し、代表チームの指宿入りを歓迎した。こうした行動が半ば自発的に発生し、訪れる方々に感動を与えることはなかなかできることではなく、誇らしく思える。

スポーツチームが合宿に来やすい要件としては、施設の充実、気候、経費等が重要であるの言うまでもないが、肝心な施設の老朽化が進み、新規施設の建設は簡単に進むものでもなく、合宿を受け入れる者の悩みというのは共通しているかと思える。こうした中で、我々の取り組みは、単に合宿のチーム数、人数を増やすだけではなく、また来てほしい、この町を好きになってほしいという想いから取り組んでいるところである。

これからの取り組み

現在本市では、「健幸のまちづくり」に力を入れ取り組んでいる。これは、健康と幸せを合わせた造語であるが、文字のとおり、健康で幸せになるという意味からなる。地方では、車社会が進み、歩くことが少ない。



サッカー男子日本代表の歓迎風景

これは、本市においても同様にいえることである。そうすると、必然的に運動不足になりがちで、その先には、病気を発症しやすくなるという結果が待ち受けている。平成24年度の県内19市中、後期高齢者の医療費は県内3位であり、市の国民健康保険会計には、一般財源を繰り入れて運営している。そこで、市では、健幸のまちづくり推進室を設置し、市民の健康づくりを強化し

ている。市民向けの健康教室、運動教室を増やし、多くの市民の参加を促し、それと同時に、健幸マイレージ制度(自主的な30分以上の運動や市の対象イベントに参加し、マイレージを貯め応募すると抽選で賞品がもらえるシステム)を設けた。また、抜本的な解決には至っていないが、このような事業を進めながら、市民一人一人に対し、現実的な医療費や体に関するデータ等を開示し、健幸のまちづくりを進めていかなければならない。その中で、スポーツは重要な役割を果たしており、子どもからお年寄りまで、スポーツに参画するよう呼び掛けている。5月の最終水曜日に15分以上継続して運動をした住民の参加率を競う「スポーツの力で日本を元気に! チャレンジデー2014」では、神奈川県逗子市と対戦し勝利した。日常の行動自体が運動であり、通勤も運動である。そう意識付けることが重要で、スポーツを通じ健幸になる。これを市民が実践し、自身の健康状態の数値として表われることを目指している。

このようなまちづくりを通じ、プロ、アマ問わず、多くの合宿チームに対し、「おもてなし」と、健幸色の強い指宿を印象付け、「指宿に来ると健幸になりますよ。合宿する選手たちも観光客も皆健幸になりますよ」その声を大にして言えるよう邁進していきたい。

